

エミリア・ワンによる丹羽海子へのインタビュー

—四国での調査旅行中の車中にて。

エミリア：まだあまり話してなかったと思うのですが、次回の展示のために何を作ろうと思っているのですか？

海：靴を作っています。ここ数年、靴に夢中なんです。今作っているのは、コオロギが住むための大きな靴型のミニスケープで、リサイクルセンターから拾ってきた材料で作っています。

E：靴について、もう少し詳しく聞かせてください。靴のどんなところに惹かれるのですか？

U：個室のトイレに座っていると、隣のトイレに誰かが座ってくるでしょう？その時に見えるのは、その人の靴だけ。でも、その靴から、社会的地位、特権、時には文化、人種、性別、年齢など多くのことを読み取ることができる。もちろん、正確な科学としてではありませんが、私はこれを推測ゲームのように楽しみます。

あと、靴のサイズが合わないというストレスが常にあります。これはある意味、終わることの無いトランスの経験です。それと折り合いをつけていかなければなりません。でもそれは、あり得たかもしれない他の可能性を想像することで、人生の中で豊かなファンタジーの物語を作り上げます。物理的な制限や身体的な制約に縛られない、完璧な靴を夢想することのように。

E：単なる靴にするのではなく、コオロギの住処にもしているという話をしていましたね。以前、私たちは、どこにも「家」が無いように感じているという話をしましたが、そのことがどれだけ関係しているのでしょうか。誰にとっても「家」ではないものに「家」を見出したり、散り散りになっているものに「家」を見出したり、あるいは何か他の…

U：以前話したのは、物理的に自身がその中で多くの時間を過ごして、さらにそこで過ごす時間が快適であるものとしての「家」について話しました。私がこの5年間履いているカウボーイブーツは、その「家」の感覚にもっとも近いのかもしれませんが。世界中のどこに行っても、誰とデートしていても、誰と友達であろうと、悲しくてもハッピーでも、この靴は唯一不可欠なもの。こんなに穴だらけでボロボロだけど、履けばこんなに快適です。

でも、同時に、中に虫がいないか、いつもチェックします。以前、牧場で働いていて、そこでは、靴を履く前に、中にサソリがいないかチェックするんです。サソリは、靴の中で快適に過ごせるので、そこをシェルターにする。だから、そのまま靴を履くのではなく、叩いて確認するんです。自分に大きなストレスがかかっている時には、自分の靴の中（特に右足の靴底）にコオロギが潜り込んでいる、そんな精神的エピソードを感じるんです。

E：コオロギに関する子供の頃のエピソードを聞かせてもらえますか。

U：そうそう、子供のころフトアゴヒゲトカゲを飼っていたんです。自分のベッドの横にコオロギが入った虫かごを置いていて、トカゲに餌（コオロギ）を与えていました。コオロギは一日中、一晩中ずっと鳴いていた。トカゲに餌をやりに行くたびに、いつも少なくとも一匹のコオロギが逃げ出しました。目が覚めると、コオロギが私の体、靴や服の中、リュックの中に這っていたりするんです。そうすると、現実が完全に歪んでしまうんです。例えば、外でコオロギを見かけると、「これは私のコオロギなのか？家からついてきて、ポケットから飛び出したのだろうか？」と思ったり、自分の視界の端で、壁を駆け上がるコオロギの幻影を見たり、自分の肩の上にコオロギが乗っているような気がしたりす

るようになりました。今日に至るまで、コオロギを感じ続けています。自分の人生で過ごすさまざまな場所で、コオロギを見つけ続けているのです。

E: これから私たちがやることを説明してもらえますか？

U: 私たちは、私の睾丸が埋まっている廃棄場に行くところです。その睾丸は、私が大学院に入学する数カ月前に摘出されました。私は仲間たちと、"Where are my balls?" というジョークを言い続けていました。これは、ガーフィールドが飼い主のジェリーに尋ねるといふミームからヒントを得たもので、「ファミリーガイ」のエピソードだったかな？「おい、俺のタマはどこだ？寝て起きたらなくなってた」みたいな。

それが高じて、睾丸から種が発芽して、やがて木になる夢を見るようになったんです。それがきっかけで、ダフネ (Daphnes) という彫刻を作るようになりました。ピューター鑄造の木の枝のようなクリーチャー。それが私の子どもたちになったのです。

そんなわけで、4年以上前に手術を受けた地元から、何時間もかけて四国まで来ています。完璧な世界では、私はこの旅からヴィーガン戦士として戻ってくるという啓示を受けています (笑)。自然や植物などと一体化するんです。わからないけれど、きっとそれはいいことです。少し、エゴの死があるってことは。

E: エゴの死？

U: もうある程度は体験したと思うんです。手術後、もう実の子供を持ってないと実感した時、すごく泣いた。あり得たかもしれないものを失ったと。子供を持つということは、人間らしさを包んでいる。私の子供は、私のスタジオで作ったものだった。それが私の二律背反の取引。そうやって多くのアーティストがトレードオフをしている。それは、この直訳なのです。

E: あなたがダフネたちを自分の子供だと言っていた時、私もまた、この旅が一種の奇妙なタイムトラベルであると感じていました。すでに子供たちを作り終わったようなものなのに、自分が作った子供たちに会うために、過去に遡っているような。この旅にはどこか、多次元的なものがあります。

似たようなことかもしれませんが、私は時々、どこからともなく曲が浮かんできて、それを改めて未来に聞くと、「この曲は未来の私のために書いたんだ。私すら、そのことを過去には知らなかった」と思うことがあります。ある意味、未来の自分がまだ知らないことを過去の自分はすでに知っていて、未来の自分が過去に自分に追いついているような、なんとなく似ているような気がします。

U: あるいは、現在の自分が、過去の自分の痛みを癒すために何かを作っている。手術をした頃は、本当に様々な痛みがありました。母は、「精子バンクはどう？」と私に尋ねたりもしました。私はそれを選択せず、クィアな子供を養子にする方向に傾いています。それもタイムトラベルのようなものです。なぜなら、自分を思い出すような子供を養子にすることは、過去のトラウマを癒すことでもあるからです。私は、二人種間の子供であるということを隠すような自分自身の複雑なアイデンティティによって、痛みのある幼少期を過ごしました。でも、私はこの子供の痛みや苦しみを癒やし、それによって—

E: —自身の中にいる子供をも癒す。